

Title	転換期に立つ経営経済学：A・リゾブスキーを中心とする試論
Sub Title	Die Betriebswirtschaftslehre an der Wende
Author	小島, 三郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1957
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.50, No.9 (1957. 9) ,p.826(58)- 841(73)
JaLC DOI	10.14991/001.19570901-0058
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19570901-0058

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

転換期に立つ経営経済学

— A・リゾブスキーを中心とする試論 —

小島三郎

一、問題の提起

「統一的な経営経済学」というものは存在しないし、又これからも存在し得ないであろう。^(注1)この言葉は今から約三十年前に、リーガー (W. Rieger) が当時の経営経済学に対して投げかけた言葉である。

もちろん今日迄の経営経済学の発展は、ある意味においては正に刮目すべきものがあつたが、しかし真に学問として、又は統一的科学として、果して充分な体制を整えるにいたつたかといへば、決してそうとはいへぬものがあると思う。現在に至つても、否現在に至つて又新たに「転換期」等の意識のもとに、多くの学者がその方法的整備に腐心しているのは一体何を意味するものであろうか。いろいろの理由が考えられるだろうが、我々とはとも角、エンゲルマン (K. Engelmann) が主張する「研究及び学問に対する出発点の本質的に、純粹商人的諸機能の技術に向けられていた」とい

う斯学の欠陥を率直に認めるべきであると考え。

しかし乍ら、確かにこの様に経営経済学はその成立の当初から方法的統一問題に悩み、且つそれに取り組んできたのであるが、その間その悩み方、取り組み方は常に一定であつたとは思われない。我々は時代の変遷と共に、その時代的方法論的特質を挙げ得るのであつて、その意味で、今日の方法論議の特質は何かといへば、大體次の様に要約し得ると思う。即ち、(一)社会科学の一として成立するための条件が検討されている。^(注2)(二)従来の先驗的本質主義からの諸規定が批判されている。^(注3)(三)故にたとえ規範学派に属する人々でも人間学的考察 (anthropologische Betrachtungsweise) をとる場合が多い。^(注4)(四)大勢的にはニールンベルグ学派 (Nürnberg-Richtung) が支配的である。^(注5)(五)数学的方法、近代経済学的思考方法に対する接近が注目され始めた。^(注6)

従つて今日においてはもはや従来に見受けられた単純な国民経済学と経営経済学の関係論議などは見ることができない。彼らは等し

く「限界的な問題は、これを他の諸科学に任し、實際的問題のみを取扱つていけば、経営経済学自体が解消する」といった意識に支えられ、もっと真奥の問題からの反省に目を向けているのである。そしてその二つの現れを我々は、例えばポットホフ (H. Potthoff) の場合には「合理的に行爲するのではなしに、多くの無意識的動機から、時々に従い(行爲が)実現されるといふことが、正に人間の特質である」という主張、又ハーゼナック (W. Hasenack) の「世界が人間の上に存するのではなく、正に人間が世界の上に存するのだ」といった意識の中に見出し得るように思う。つまり我々は一般的には上記の様な諸特質を列挙し得ると共に、更に一歩進めて考えてみると、今日の方法論者が、例えばリゾブスキー (A. Lissowsky) が随所で主張している様な、人間、そしてその人間の能力的限界、更に、その行爲の非合理性といったもの、或いはそれとの学問的諸関連に深い造詣を有しているという根本的特質を挙げうると考え

る。それ故に、若し我々にして統一的な経営経済学の確立に努力し、且つそのために現在の方法論者の主張及び性格を真に理解し、了解せんとするならば、正に彼等をして上記の様な言葉を吐かせた背後にひそむものが問われ、且つ理解されなければならないと思う。別言すれば、その背後にひそむものを理解することによつて、彼らの真意、傾向といったものが把握し得ると思うし、又社会科学の一つとしての経営経済学を成立せしめる道が開けるのではなからうか。

転換期に立つ経営経済学

ではそれは一体何に求めらるべきであらう。私はその一つの因子を学問論を含めた意味での思想的潮流の変化と、それに対する彼らの造詣との関連に求むべきだと思ふ。つまり私は前記の人間行爲の非合理性、或いは無意識的活動性、更には世界の上に人間が存するといった一連の主張をヤスパース (K. Jaspers) 等の現代哲学者の思想と結びつく、又結びつくが故に彼らの主張に支柱ができると考えたい。もちろん、方法的研究者達がこの関連を明白に主張しているわけではない。我々はそれを所々の断片的主張と彼らの引用文、そしてその参考文献を通してリッケルト、ディルタイ、ヴィンデルバント、ウェーバー、ニーチエ、シュプランガー、ヤスパース等々との関連を知るのみである。^(注7)従つてそれはあくまでも一試論の域を出ない、否或る種の危険すらあるかもしれない。だが彼らを理解すると共に、我々自身の方法的態度決定のために、ここにその関連を求めることは無意義ではないと思ふ。そこで具体的には以下、先ず私自身が理解する現代思潮の特質をのべ、次にその観点から一方では従来の規範的経営経済学——特にニックリッシュ (H. Nicksisch) ——を論評し、最後にリゾブスキーの主張の現代的意義を明らかにしたいと思ふ。

(注1) W. Rieger: Einführung in der Privatwirtschaftslehre, Nürnberg, 1928, S. 32.

(注2) K. Engelmann: Die Betriebswirtschaftslehre an

der Wende, Zeitschrift für Betriebswirtschaft, 1957, Nr. 1. 等の一連の主張を指す。

(注c) K. Engelmann; a. a. O., S. 33.

(注d) H. Keinhorst; Die Normative Betrachtungsweise in der Betriebswirtschaftslehre, Berlin, 1956, S. 11 ff. 等を参照。

(注e) A. Lisowsky; Grundprobleme der Betriebswirtschaftslehre, St. Gallen, 1954. 等を指す。第五節参照。

(注f) W. Hasenack; Methoden- und Entwicklungsprobleme der Betriebswirtschaftslehre, Festschrift für Kamrad Mellerowicz, Berlin, 1952, S. 1 ff. 等を指す。

(注g) 現在活躍している M. R. Lehmann, F. Schäfer, W. Verschöfen 等はミュンヘンヘルムホルツ大学にいる。

(注h) E. Gutenberg; Grundlagen der Betriebswirtschaftslehre Berlin-Göttingen, 1955. に於ける数学的方法を指す。

(注i) Engelmann; a. a. O., S. 37.

(注j) E. Potthoff; Die Leistungsorganisation deutscher Großunternehmen im Vergleich zum westlichen Ausland, Zeitschrift für handelswissenschaftliche Forschung, 1956/7, S. 422.

(注k) W. Hasenack; a. a. O., S. 6.

(注l) ここに掲げた人名は、前記 Keinhorst, Lisowsky, Lehmann, Hasenack 等と更に Neuloh 等から抽出したもので a. a. Neuloh については彼の Die Deutsche Betriebsrerrfassung, Tübingen, 1956 を参照。

二、現代的经营経済学者を支える思想的背景

さて今日の经营経済学方法論者が新カント学派以後の哲学者の思潮を好んで引用し、参考としているという事は前述の通りである。ではこの新カント学派以後の思想とは一体如何なるものであろうか。私は先ずこの問題から明らかにしてみたいと思う。

そこで第一に問題にされるべきことは、——新カント学派自体は一時除外するとしても——^(注1) デイリタイ以後の思潮が、現代の社会生活における不安、絶望、分裂という人間の宿命の上に立っているという事だと思ふ。例えばマックマレーは「近代のデイレンマは、そのどちらを選んでも喜ばしくない両つのものの何れかの選択に吾々が当面していることからくる」と主張し、悪くこそなっても決してよくはならない選択の前に我々が立たされているところに不安と絶望のあることを述べ、その上に立って彼自身の「哲学的問題が個人的生活にせよ、社会的生活にせよ、生活の内的意義の問題であることを理解するであろう。これこそ哲学の核心である」という一連の主張を確立している。つまり不安といひ、絶望といひても決して現代にのみ特有ではないのであるが、特に今日の我々の宗教的、政

治的、思想的、その他一般的社会生活において、本質論的精神支柱の欠如の結果、^(注2) 或る場合には挫折の神秘主義によるか、又は成功の神秘主義によるか、^(注3) 或いはヤスパースが言うように、キルケゴールやニーチェの如き例外者の意識を持った人間以外に救われないという^(注4) ことへの認識こそがその思想の立脚する背景の特質だと思われる。

即ちリゾプスキーが引用するデイリタイについていえば、我々にして「何故に、又何が彼をして、従来の一元論的世界観の研究に不信と反省を向けさせ、且つかの多元論的に世界観が存在し得ることを主張せしめたのであろうか。」^(注5) ということを考察する場合、もちろん新カント学派の人々がそうであったように、デイリタイ自身もそれ以前の思潮の持つ主知主義に対する反動ということが一つの動機になっているには違いないにしても、更に我々はその奥に、人間の能力的限界と現代の社会生活自体に対する彼のニヒリズムを看過するわけにはゆかないと思ふ。

そして正にこの現実的生活態自体における不安と絶望と分裂の認識が、他面において哲学的思想自体の不可知論的性格を生み、且つそれが、従来の本質探求が現象又は存在或いは現存在の研究以上に優位に立つという暗黙の承認に対する不信と反省となつて現われてきていると思われ^(注6)。従つて思潮という観点から見れば、いわゆる神学的本質主義——概念論的本質主義——現象学的本質主義という一連の反省の結果が、正に現在ここで問題とせられて居る思想にいたる道であると考えられる。逆にいえば、「唯世界の『形式』だけ

転換期に立つ经营経済学

が正に『世界』として示される^(注10)」という思考に支えられ、物自体とか、物質的対象世界とか、精神世界といったものにつきまとわれぬ^(注11) ということ、又その解決にこだわらぬ^(注12) ということに当該思想の次の特質を見ることができると思ふ。つまり意識についていえば、それは「私はその世界を意識している」ということは何よりも先ず「私はその世界を直接直観的に眼前に見出す、即ち私はそれを経験している」という意味である^(注13)。ということであり、このことは窮極まで推し進めれば、結局意識それ自体は何ものでもないという考え方である。而もそれは正に「現在においては現象のみしか問題に出来ぬ^(注14)」ということでもあると思ふ。

かくして我々は今日の或る種の哲学的思想が、——決してそれ自体がそうであるというのではないのだが^(注15)——現実生活態における人間の不安と絶望の状態の認識に立脚し、それ故に十九世紀的な本質優位主義、又は絶対的価値の設定に対する不信と反省という一大特質を有しているのを知るのである。そして斯かる思想は、上記の如き特質を持つ故に、次に先験的又は本質主義的なものから演繹される倫理観なり、道徳観といったものに対する不信と反省という特性を持つにいたっている。今例をもつて説明すれば、仮りに現在に住む我々がこれらの思想に立脚し、又それを認める場合、例えばその行為基準を十九世紀的な概念論的本質主義の立場から押しつけられるとしたらどうであるかを考えてみよう。我々は一方において求め求め得なかつた哲学の変遷を、而も特に現象学的本質主義から実

存主義までの変遷の歴史のあることを知っているとしたら、その帰結は余りにも明白であると思われる。即ちこの場合それらからの倫理、道徳、規範といったものに対峙せしめられるとしても、我々にしてその論理的精神に即して思考する限り、我々には多数の倫理、規範といったものが対峙せしめられる結果、我々はそのどれに従うべきかという態度決定の問題に悩まされ、遂には判断の妥当性をも失し、極端な場合には妥協することもなつて、結局はキルケゴールが主張するように「^(注16)退屈を覚える」ことになると思う。逆に言えば、我々が現代という社会において、正に多数の空虚なる、而も複数の道徳、規範に対峙せしめられたことによつて、哲学的変遷の観点から見ればかの現象学から実存主義までの一連の流れが生じたのである。故にここで問題とせられている哲学者達の第二の特質は正に前述の不可知論を基底とする限界の思想であると考えられる。もちろんかく主張したからといってそれが彼らが倫理なり規範といったものを全く問題外に置いて置いているということを意味するものではない。否むしろ彼らこそこの問題に切実さを認める者達である。彼らがいかにこの問題に腐心しているかは次の諸主張が語ってくれると思う。即ちアルベール・ペガンは「我々世界の認識には無関心でいられるにしても、行動しないわけにはゆかない」といい、フルキエは「^(注17)道徳的に生きるということは人間として生きるということである。しかし我々が模範として生きねばならない人間とはどの様な人間なのだろうか」という疑問を投げかけ、又ポーツヴォールは「道徳は悟性

の天空にはっきりと書きこまれた偉大なる神聖な文字、つまり『正義』と『法』と『真』とを行為の規範とせよといい、その原理を絶対のものとして道徳と見ている。従つて地上の目的を^(注18)追えば、どんな人間でも初めの一步から道徳の外に出でしまうのだ」とその矛盾を指摘しているのである。従つて彼らは決して人間からこの問題が切り離せないにも拘らず、本質主義的な規範も求め得ないという背反関係から、改めて「人間が人間であるあり方」の哲学的考察に向つていのである。彼らが「人間が人間であるあり方は、常に半径の一定している円の様なものではない。人間は自らあらしめたもの、自らかくあらねばならぬと選択したところのものなのだ。与えられた状況がどういふものであつても、人間が自分のおかれた状況に向つて逆に働きかけることは自由なのであるから、これこれの未来が必然であるとは決していえない。……中略……(我々は)最早目的すら再考しなければならぬ。目的の正当化ということが改めて考えられねばならない。目的は目的自身としては最早何の意味もたない。何故なら得られた結果が人間にとって何の値うちもなければ、それは絶対に値うちのないものだからである。」という時我々はそのから何を受けとるべきであらうか。我々はそこから正に「人間の幸福とは人間が自己の一部をそこに賭ける、この賭けるも^(注19)によつて始めて幸福はなりたつのだ」という意味において、目的と手段の連帯ということ、つまり一つの目的をどんな手段でも実現できるというのは間違いであるといつた生活態度の要請を知るの

である。^(注20)

それ故に結局換言すれば現代の哲学的思想は、十九世紀の本質探求主義を放棄し、従つて又旧い道徳規範にとらわれることを否定し、目的手段の連帯を説き、即ち「あらゆる理由は自由によつて生ずる」^(注21)ことを教え、各人がその自由なる選択を、自らの真・善・美の規範を立てつゝ行使する精神的な生活態度を要請するものであるとい

und phänomenologischen Philosophie, I, 1913. 邦訳一〇五

- (注1) 高坂正頼著「カント学派」には新カント学派とドイツ学派を区別すべき理由が詳しく論ぜられている。
- (注2) 山内得立著「実存主義」十二頁以下。
- (注3) J. Macmurray; Freedom in the Modern World, 1932. 邦訳三頁以下。
- (注4) J. Macmurray; Freedom, 邦訳二三八頁以下。
- (注5) P. Foulquie; L'Existentialisme, 1951. 邦訳一〇九頁。
- (注6) K. Jaspers; Vernunft und Existenz, 1935. 邦訳一五頁以下。
- (注7) W. Dilthey; Die Forschung der Weltanschauung, Gen 1907. 参照(邦訳岩波版による)。
- (注8) この主張は山内得立著、前掲書を始めフルキエ等多くの入達により主張されている。

注10) E. Husserl; Ideen zu einer reinen Phänomenologie

転換期に立つて経営経済学

- 頁。
- (注11) E. Husserl; a. a. O., 邦訳一〇二頁以下。
- (注12) E. Husserl; a. a. O., 邦訳一〇三頁。
- (注13) P. Foulquie; L'Existentialisme, 邦訳三四頁。
- (注14) 実存主義哲学者は彼らの哲学が決して絶望にいたる哲学でないことを論調している。
- (注15) S. A. Kierkegaard; Euten-Eller, 1843. 邦訳一七頁。
- (注16) アルベール・ペガン他著「カミュー研究」十一頁。
- (注17) P. Foulquie; L'Existentialisme, 邦訳一〇頁。
- (注18) S. Beauvoir; L'Existentialisme et la Sagesse des Nations, 1948. 邦訳四頁。
- (注19) S. Beauvoir; L'Existentialisme, 邦訳四九一五〇頁。
- (注20) S. Beauvoir; L'Existentialisme, 邦訳五五頁。
- (注21) 自由についてはヤスバースの「現代ヨーロッパの精神的課題」(邦訳創元社版)が明解である。

三、現代の哲学における科学の位置と課題

以上の論述からも明らかな様に、現代の哲学の説くところは正に我々にしては十九世紀的な本質主義的なものに立ち得ないとい

うことであり、目的と手段の連帯に於いて、自由なる選択を行い、みずからをかけて生きるという精神的な生活態度の要請である。

そこで次に我々にして問題にすべきは、それではかかる関係の中で科学は一体いかなる位置付けと課題を担うものであるかということであると思う。しかしして前述せる所でもあるが、人間が行為する場合、その行為規準を十九世紀の本質主義的規範等に求めても、どんな人間でもその第一歩からその様な規範の外に出てしまうことは明らかである。従って現代のかかる哲学的基盤に立つ限り、先ず科学がその様な人間行為の決定の場に干渉し得ないという一つの大きな枠が存在するという事は容易に想定し得ると思う。しかもこの場合、哲学ですらその規定にあずかり得ないということに我々は深く認識すべきだと思ふ。何故か。それは——我々は自己の存在そのものの選択の自由を持っているのでは決してないが——少なくとも経験における自由を持っているからである。つまり我々は経験の自由を持っている。故に我々は又我々自身の肉体的存在をも含めていわゆる即自的物事の存在と、何ものかについての意識を通しての実存的世界の存在性との関係において、又それとみずからの規範との関係において選択の自由を行使するものだからである。それ故に我々は科学が人間の選択の自由に干渉し得ないという一つの限界を知るのであるが、しかしそこに、つまり人間の認識以前に思惟の外に何ものかの存在のあることは否定し得ないといえる。即ち即自的世界と人間の認識を経て実在せられる固有の世界とである。しかしして

このうち即自的世界とは上述の所からも理解できる様に、それは自己同一的世界であり、あるところのものであり、その実現するプランとかいう様なものを何ら他に送り届けないものである。換言すればそれは何ものために存在するものでなく、存在すべき必然性もなく、ただ事実上の存在を持つのみである。しかしして他方この即自的世界に對するもう一つの世界、即ち我々によって実在せられる世界は正に我々によってのみ実在するところのものであり、それ故にそれは我々とその世界に依存するものではなく、反対にその世界が絶対的に我々に依存するものである。

そこで結論的にいえば、人間の選択の自由に干渉し得ない科学は、当然この世界との関連に於てその位置及び課題が問われねばならないと思われる。我々はヤスパースが「科学の対象は世界である」といった意味を、正にこの様に理解する。そしてこの関係をよりよく理解するために——それは必ずしも適例とは思われないが——今ベルグソンの主張を引用し、この関係の理解の一助にしたいと思う。ベルグソンは次の様にいっている。即ち「今一つの色、例えば橙色を取るとする。我々はその他に赤と黄色を知っているから、我々は橙色を或る意味では黄色、或る意味では赤と考へて、それが黄色と赤の混合だといふことが出来る。しかし仮に、橙色はそのままあるとして、黄色も赤も未だ世界に出て来なかつたとする場合にも、橙色が既にこの二つの色の混合されているものといえるであろうか。勿論いえない。赤の感覚と黄色の感覚とは神経及び脳髓の複雑な機

構と同時に意識のある特別な状態を包んでいて、生命の創造であるが、それは創り出されはしたけれども、創り出されずにいることも出来たのである」と。つまり今仮に、赤、青、黄色、及びその他の色があるとすると、この場合それらの色の存在は単に即自的世界である。しかししてある一人の男が橙色を創り出そうとしたとする。而も彼はその場合種になる色の中から赤と黄色を選んで彼の考へる、又は欲する橙色を創造しようとしたとする。この際青以下彼の選択にもれた色は、正に彼により虚無化せられ、他面赤と黄色は、彼によって実在又は実在化せられた世界を構成する。さてこの実在せられた赤と黄色が直ちに橙色として実存せしめられるのではない。たとえ赤と黄色のどれだけの配合により、どの程度の橙色ができるかということがその男にわかっているにしても、その内のどれを創り出すかは正しくその男みずからの真・善・美の選択規範に従うのである。そこで、一体科学自体は上記の様な観点に立つ限り、そのどの橙色を創り出すかという彼の規範に干渉し得ないことはいふまでもない。科学はこの場合、その男と赤、黄色をも含めて、即自的世界がどうであるかを説明するものであり、且つ実在化せられた世界(この場合赤と黄色)についてもそれは、(人間の)実存に對しそれがどの様な性格を持ち得るか、因果性があればそれはどの様な因果性であるかを説明することをその課題とするものである。換言して価値判断という面からみれば、科学はその与件部分にのみ関係を持つものである。従って科学はもちろん価値判断がなされた次の瞬間

転換期に立つ経営経済学

間、その価値判断をも含めた世界に關係するが実存そのものであったものに到達し得ず、単にそれを事実に従って取り上げることができるのみであり、又その意味で、科学は科学自体、或いは広く人間がいかに率直にその善くも悪くもない、ただあるがままの世界を觀照することができる様な状態でその世界を説明するかに腐心するのみである。

そして我々はウェーバーが「一面性こそ望む所だ」といい、没価値判断の主張をなし、理想型を提唱する真の基底は、彼が正にこれらの哲学的思考に立って、ニヒリズムと不可知論に立っているが故に「一面性こそ……」であり、世界の率直な觀照が使命であるからこそ没価値判断であらねばならず、そしてその率直の觀照を人々に伝える手段として理想型Ⅱの秩序性が考へられたのだと思ふ。

(注1) S. Beauvoir: L'Existentialisme, 邦訳二七頁。

(注2) J. P. Sartre: L'Être et le néant, 1943. 邦訳五六〇頁、五六七頁。

(注3) シュンペーター著「文化哲学の諸問題」一六頁。

(注4) P. Foulquie: L'Existentialisme, 邦訳七七頁、七八頁。

(注5) K. Jaspers: Vernunft und Existenz, 邦訳八三頁以下。K. Jaspers: Die geistige Situation der Zeit, 1932.

邦訳一七〇頁以下参照。

(注6) H. Bergson: La Pensée et le Mouvant; 邦訳「哲

学の方法」二六頁。

(注7) この言葉はウェーバーの「客観性」の論文の中の言葉であるが、それと共に我々はかのヤスパースが前掲書の中でウェーバーの説明をなしていることに注目したい。

(注8) 上記引用語とこれらの関係については拙稿「F・シェーンブルックをめぐる若干の基本問題」三田学会誌五十巻四号でふれた積りである。

四、規範的経営経済学における若干の問題点

さて以上、ごく簡単に私自身の理解するヤスパースを中心とせる現代的哲学思考を説明した積りである。そこで今後はこれらの思潮が果してどの様に、これら哲学者達を引用し、参考とする現代の経営経済学方法論者と結びつくかが問われねばならないと思う。もちろんそれには、現在の経営経済学者が誰も明白な形でその関連を説いていないという前記の困難が予想されるのであるが、少なくとも上記の諸学者及び彼らの主張だけをとり出して考えれば次の様に関連せしめ得るのではないかと思う。即ち例えばポットホーフの引用した「合理的に行爲するのではなしに、多くの無意識的動機から時々に従い(その行爲)が実現されるというのが正に人間の特徴である(注1)」という言葉は、ポットホーフ自身が人間における経験における選択の自由ということを理解し、且つその様にして現われる行爲を世界にのみ関係する科学から見れば全く無意識的動機からの行爲

に映ると強く思考していた結果、主張された言葉だと思し、又ハ―ゼナックについてみれば、その「世界が人間の上にあるのではなく、人間が世界の上にあるのだ(注9)」という言葉は世界が世界としては何ものでもなく、人間によって虚無化されたり、実在せられたりするものであってみれば、人間は人間にとってのみ尊いという命題を彼が理解していたが故に吐かれたものであると思う。又更にリゾプスキーについていえば――後述するところであるが――その「人間行爲の非合理性」ということは、正にみずからの規範に従って行使される選択の結果としての行爲は、思惟関連における秩序性という立場に立って眺める限り非合理的であるということの表現であると思うのである。

しかししてこれらの人達――特にこの論文ではリゾプスキー――との関連及び主張の特質はなお後で検討することとし、ここにリゾプスキー等を特に浮彫にする意味で、従来の規範的経営経済学が一体如何なることを考え、いかなる基底を有し且ついかなる特質を有するかにについて、その論理的・精神的・論理構成において最も優れているといわれているニックリッシュを中心とし、而もこの際その著「経営経済」(Die Betriebswirtschaft)の第七版に沿って検討してみたいと思う。

ニックリッシュはその著の冒頭において先ず経済生活とは一体何であるかという問を發し、それに答えることから始めている。即ち彼によれば「経済生活とは人間が価値を捕捉し、生産することである(注10)」。故にニックリッシュによれば「(凡そ)経済の内部には何もかも存在せず、つまり経済をなすということ以外には何もかも存在しない。……中略……そこで我々の研究は経済の深さに向うのだ」といふ。即ち彼の言葉をもってすれば(Tiefengrenze)が問題なのだといふのである。換言すれば原因はどの程度まで経済に導入せられるべきかが問題となり、且つ一体原因が基底として働くか否か、若し働くとしたらどの程度働くかということが問われねばならないのであった(注11)。

そしてここで我々が注目すべきことは彼が「我々を導くところの基底はそれ以外に与えられる凡ての現象によって限界づけられたるものだ」と主張していることである。故に彼によれば当然「他の全体現象に對峙する全体現象とは一体何であるか」が問われねばならず、それは結局「内的統一によって存在するもの」と答えられたのであった。そしてこの内的統一は正にそれを理解するのに基底部分の内的関係を指しては考えられず、又かかる内的関係は同質的諸原因力が構成要素として内在する場合のみ存在するものであるから、故に基底は単位であると説明されたのである。而して彼によれば「(この場合)人間こそ正に意識をもった基底であり……中略……人間をかかるとして認識することが同時に法則認識の近道であり、更に我々に経済の洞察力を与えるものである」ことが主張されたのである。かくして彼も又他の方法論者又は哲学者と同様に人間

り、且つ人間はその価値を生むもの(注12)であると定義する。而して経済過程とはいかなるものであるかということに答えて「人間の欲望とその充足間の中間地の橋渡しを意味する」といふ。そして正にここに多数の経営が存在し、又現われ、従って経営という構成体的目的は正しくこの橋渡しにあると説明する。そこで次にニックリッシュは、それではその経済に作用する諸原動力(Kräfte)は一体何であり、いかなる種類のものであるかを問題にするのである。つまり下向的設問法を採用し、そしてその結果我々は原因(Ursachen)の問題に当面するといふのである。そして又この原因に關し、彼はそれが必ずしも単数であり得ず、むしろ多数存在するものであり、且つそれは我々の全生活において形成されるものであることを説明する。而も更に原因は諸根底(Gründe)を通して結果(Wirkung)に作用するのだとも説明している。即ち Ursach—Gründe—Wirkung という一連の分析が彼の経済的原動力(wirtschaftliche Kräfte)の支柱的考察方法である。

そして彼によれば「人間こそ目的及び方向といったものに対し原因を与えるところのものだ」といふ。即ち結果としての製品は工場

意識の研究に向い、人間意識において欲求から意欲 (Willungen) が
 一として行為 (Handlungen) が成立すると説くのである。そして
 又動機は常に欲求の随伴現象として現われ、且つ意識にて作用する
 強度、即ち欲求の度合から導かれるとも説明している。^(注16)

ここにいたりニックリッシュはこれまでの下向的研究を上向的研究
 究に転じ、欲求感情が根底の表象 (Vorstellung) を招来し、つま
 り何か欠けているという表象が意識における欲求との連繫で規定
 され、それが又動機に外ならないとする。そしてこの動機はあらか
 じめ活動の形象 (Bildung) を持っているから、今や動機化せられ
 た意識から目的設定が行われるというのである。又そこから根底
 が、又創造せられる行為が成り立つとも説明する。^(注17)

そして結局彼によれば上記のことから我々の欲求充足がどの程度
 到達せられるかということは、原因—根底—結果間に我々の認識が
 どの程度伸長しているか、且つどの程度確実であるかということに
 依拠し、それは当然次に原因であるところの多数の欲求のうちどれ
 が目的設定をなす程にその時の動機を支配するにいたるかが問われ
 ねばならないのであった。^(注18)

そこでニックリッシュは再度意識を問題にする。彼は次の様に主
 張するのである。「先ず意識を考えてみれば、意識の中核は人間に
 あって経験において生ずる所の自己意識、即ち直接的自己意識であ
 る。そして人間を精神的な存在物になすかか深奥の自己意識こ
 そ、正にそれは良心 (Gewissen) なのである。而して良心におい

て人間はその存在を、且つ総ての事象の存在を、全体及び肢体とし
 て意識するのであり、そこから又欲求の動機がその支柱を獲得する
 のである。^(注19)と。つまり彼は基本命題的に重要なものは「精神的存在物
 たる人間」ということであり、それを成り立たせる本質が良心であ
 るというのである。しかも彼によれば、「良心に従って考察すること
 により我々には経済の方向が認識されるから、即ち根底の法則性が
 認識されるから、結局意識における欲求の諸関係が、又規制せらる
 べき法則性が示される」とも主張されているのである。つまり具体
 的にいへば維持、形成の法則が、目的設定の法則が明らかになれ
 るのであり、又更に目的という見地から経営なら経営、経営経済な
 ら経営経済という事象を研究する場合、而もそれがそこに参加する
 多数の人の存在を前提とする場合、いわゆる自由の法則、良心の法
 則、又は精神の法則という目的設定の法則から接近せられ、解釈せ
 られ、即ち積極的な主張がなされるというわけなのである。そして
 それが自然をとり入れたる根底、即ち有限なる財貨の存在と結びつ
 いた意識、動機からの目的、根底、更に意識における良心による全
 体と肢体の存在が直覚せられることを前提とした研究がなされる場
 合、いわゆる維持の法則としての目的設定の法則から接近され、解
 釈され、結局規範の樹立にいたるといっているのである。^(注20)

さて以上がニックリッシュの説く所であるが、我々は更に規範学
 派を整理するという意味で、かのシェーンブルク (F. Schön-
 blurg) の「個別経済学における方法問題」(Das Methodenproblem

in der Einzelwirtschaftslehre) における規範学派の一般的規
 定に注目しよう。即ちシェーンブルクは次の様に規定する。「規
 範科学は客観的に与えられたる規範価値体系の基本表象に依拠して
 おり、而もその規範価値は絶対的なるものとして、あらゆる思惟
 に、従って認識科学的なる思惟に与えられるものである。故に科学
 にとつて——特に個別科学にとつて——適当なる特殊価値を規範化

すること、及び十分に理解的な最高の規範体系に整序することがそ
 の課題である。別言すれば前者が後者に還元せられ乍ら、特殊価値と
 基本価値との同一性を確立することが正に課題である」と。又更に
 次の様にも主張している。即ち「現実と与えられているものが、認
 識にとつて窮極的、決定的なものではない。最高のもの、一般的な
 もの、絶対的な価値と一致して規範体系に証明されるものが決定的
 なのである。最高の基本規範からして総ての認識は初めて実施と意
 味と目標が得られるのである。総て認識の内容は正に正当と認めら
 れた当為 (Sollen) である」と。^(注21)

もちろん我々は上記の説明だけでは、ニックリッシュとシェーン
 ブルクの規定とが直ちには結びつかないと感じられるかもしれない。
 い。しかしニックリッシュが更に帰納と演繹の関係を取り扱った章
 で、「経営経済学が帰納法と関係のないことは特に注意を要する。何
 となればこの学問においては自然関係の取扱いは常に目的作用から
 始まってこれに必然なる基礎にもどってくるからである。……中略
 ……精神的に探求せられる関係を帰納法の如き一般化の方法によつ

転換期に立つ経営経済学

て認識せんとすることは不可能である。それは個別化並びに直観に
 よつて達しうる」といった主張に接する時、我々はシェーンブル
 クの「規範科学にとつては現実の相互関連の確定に留るものでな
 く、存在の相互関連の意味について考慮し乍らその一般的妥当的価
 値体系への整序をもたらす時、始めてその課題が決る」という説明
 と容易に結びつき得るものと思う。

そこで次に前章で論じた様な観点からニックリッシュを検討して
 みよう。先ず私は上記の説明を二分して考察したいと思う。即ちそ
 の一は原動力から始まって意識を経て動機にいたる一連の論理構成
 と、他は再び意識の問題から始まって良心の原則、更に他の諸原則
 にいたる説明とを二分して検討したい。而してこの中前者の論理構
 成に對しては我々はそれが正に現代的な、従って卓越した見解であ
 ると思う。何故なら意識を例にすればよく理解し得ると考えるのだ
 が、つまりこの場合における意識は何か欠けているという意識に
 おける一つの状況から欲求が、そして又意欲と行為が成立するとい
 った関係がとかれており、従つてこの考察を更に推し進めてゆけば
 結局フッサール流の「意識はそれ自体においては何もものでもない」
 という極点にまでいたると考えられるからである。しかし乍らこの
 関係の追求は彼の場合ここで一応放棄されている。即ち次にとりあ
 げられたもう一つの意識の研究においてはそこに突然良心が出現す
 る。つまり彼の言葉をもってすれば、意識における深奥の自己意識
 が良心であり、人間は正にこの良心において存在を、且つ事象の存

在を意識するのだという。別言すれば彼によれば意識の外に更に別の意識が存在することとなる。そしてそれが本質的存在であると主張するのである。

もちろん我々は意識の外に本質的存在が存在するといってもそれ自体を否定するものではない。それは存在するかもしれないし、又存在しないかもしれないのである。しかし乍らその様なものが必ず存在し、且つそれが人間行為を必ず規制し、逆に行為はそれに沿ってなされるべきであり、科学はその探求と設定にこそ課題があるのだと主張せられる時我々はニククリッシュを離れざるを得ない。何故なら我々はそこに飛躍と、前述せる所である様な十九世紀の本質主義的見解を感じるからである。換言すればその様なものから導かれる規範に我々が従いうるか否かに疑問を持つからである。

(注1・2) これらの語については第一節問題の提起における両者の注を参照されたい。

(注c) A. Lisowsky; Grundprobleme der Betriebswirtschaftslehre, St. Gallen, 1954, besonders S. 31. ff.

(注4) H. Nicklisch; Die Betriebswirtschaft, Stuttgart, 1932, S. 6.

(注5) H. Nicklisch; a. a. O., S. 6.

(注6) H. Nicklisch; a. a. O., S. 6~7.

(注7) H. Nicklisch; a. a. O., S. 8.

五、転換期における経営経済学

——リゾプスキの主張とその解明——

さて前章で我々はニククリッシュの主張を中心に、彼の優れた論理的精神にもかかわらず、彼と離別せねばならぬ理由を明らかにした。そこで若し現在において我々にして科学としての経営経済学を確立せんとするならば、我々は先ずニククリッシュの飛躍及び先験的、又は本質主義的規定をいかに除去し、これを克服するかという問題にその焦点がしぼられる筈であると思う。即ち我々はここに、その様な本質主義的規定の援助なしに、而も科学として成立するための条件の研究に向うべきだと思う。もちろんそれは我々にして容易な業ではない。我々は一步一步築き上げねばならないであろう。そこでここでは一九二七年から一九五二年までスイスのセント・ガレン商科大学で活躍したリゾプスキを取り上げ、少しく彼の主張を聞き、我々の指針にしたいと思う。

彼はその著「経営経済学の基本問題」(Grundproblem der Betriebswirtschaftslehre) に於て先ず倫理学と経営経済学の関係の説明から始める。即ち彼によれば、従来この両者の関係の曖昧さが経営経済学の性格を不明たらしめていたのではないかという疑問をなげかける。^(注8)つまり彼は「経営経済学は経営の法則性の科学である」というニククリッシュの命題が「合理的認識の活動可能性の総計即ち科学という意味なのか、それとも経営から生ずる経験的知識という意味であるのかという反省から始め、^(注9)而も「我々は現在倫

(注8) H. Nicklisch; a. a. O., S. 9.

(注9) H. Nicklisch; a. a. O., S. 10.

(注10) H. Nicklisch; a. a. O., S. 11.

(注11) H. Nicklisch; a. a. O., S. 11.

(注12) H. Nicklisch; a. a. O., S. 12.

(注13) H. Nicklisch; a. a. O., S. 13.

(注14) H. Nicklisch; a. a. O., S. 14.

(注15) H. Nicklisch; a. a. O., S. 14.

(注16) H. Nicklisch; a. a. O., S. 14.

(注17) H. Nicklisch; a. a. O., S. 15.

(注18) H. Nicklisch; a. a. O., S. 16.

(注19) H. Nicklisch; a. a. O., S. 16.

(注20) H. Nicklisch; a. a. O., S. 17. ff.

(注21) H. Nicklisch; a. a. O., S. 18~22.

(注22) F. Schönpfung; Das Methodenproblem in der Betriebswirtschaftslehre, Stuttgart, 1933, S. 76.

(注23) F. Schönpfung; a. a. O., S. 77.

(注24) H. Nicklisch; a. a. O., S. 22. ff, besonders 26~27.

(注25) F. Schönpfung; a. a. O., S. 77.

客観主義的立場に立つていた。三三三年のシヤンムルは規範学派的だが、三三六年には科学的

の時代に住んでい^(注4)るとしたら、経営経済学が倫理をとり入れる

可否か、とり入れるとしたらどういう方法でとり入れるかを第一の

問題としてい^(注5)るのである。しかして更に彼は倫理学と呼ばれる学問

に果して従来の如き規範樹立を期待していいものかどうかの問題に

向い、結局「科学としての倫理学は支配的な倫理的観念を検討し且

つ分析することを課題とするために、それを明白に説明するもので

ある」との結論を得、最も意義深い人々の膨大なる精神活動にも拘

らず、二千年の間倫理学はその解決(規範樹立)に一步だつて近づ

いていないし、而もその形式化どころではない」とい^(注6)うことと共に

倫理学自体をも我々に関する限り説明的科学に規定したのであつ

た。換言すればリゾプスキは二千年の間の努力にも拘らず、結

局我々は絶対的な意味での価値又は規範樹立は不可能或いは考えら

れないという観^(注7)点に立ち、我々が利用し得るのは心理学、又は社会

学の意味と殆んど同じものとしての説明科学たる倫理学であり、そ

れ故に次に我々が問うべきは、その様な倫理学と経営経済学との関

係であるとしたのである。

しかも他面において絶対的価値又は規範に対し、上記の様な関係

しか持ち得ない我々にしてみれば、又まして経営経済学という一つ

の学問に立つ限り、我々にして行為の道德的な眺望に関し何ら決定

し得ぬから、彼はそれを「科学的に設定せられた人間にとって(そ

れは)無関心な問題」であるとして排斥し、且つ行為の問題と認識

の問題とを区別し、経営経済学の科学としての成立を、科学的認識

問題内における一定観点、つまり科学的に封鎖性を確立し得る様な一定観点と態度決定の問題にこれをもちこんだのである。それ故に又倫理学との関係に限る限り、彼は行為せずにはいられないという意味でその倫理的、倫理学的要素を重視するが、しかしそれはあくまでも「行為価値は科学にすら規制されない」という関係で実際の活動にとっては一つの収益性要素でしかないのであるから、経営経済学の一つの観点から体系化する場、それには補助科学という位置を与えたのである。

ここにいたってリゾプスキーは、若しも観点と封鎖性が科学を性格付けるにしても、やはり科学自体の持つ特性は一体何であるかというところにその考察の目を向け、自然科学、精神科学、経済科学と経営経済学間の相違を明らかにしようとするのである。(尚この中精神科学の彼の規定は現在の私には組みし得ない多くの主張が含まれるから、ここでは特に自然科学と経済学の関係だけを取り上げてみたいと思う。)

さて自然科学と経営経済学をも含めた経済科学との関係について、彼はその法則性の分析、検討から取り扱っている。そしてこの場合においても経済科学に於ては人間の社会的活動が対象とせられる限り、「原因と結果とを数学的方法で凡て表現しうる程明白にして窮極的法則に具体的経営経済現象を還元することは不可能である」といういわゆる不可知論的立場に立ち、たとえ数学的方法を採用してもそれは一つの立場に立った上での蓋然性を表示し得るのみであ

ると主張しているのである。又経済科学では実験が不可能であるために、「一定条件の孤立化及び技術的製成をしてその確定は全体として生活している人間には不可能である」とも説明している。即ち彼によれば正に不可知論と人間行為の不合理性に立脚し、自然科学と経営経済学間に内容的同一性は決して存在しないが、形式的同質性は後者が一定の観点に立って理想型的な構成を志向する限り成り立ち得るといふのである。しかしとも角彼の場合経営経済学を余りにも自然科学的に形成し、且つ完全法則性の意味を与えることは否定されていくことは注意すべきであろう。

斯くしてリゾプスキーの場合、多くの不備にかかわらず、例えば我々の最も関心事たる経済科学と経営経済学との関係はその精神科学の規定の不備から敢て説明しなかつたのであるが、だがそれにもかかわらず彼がニククリッシュの命題の分析から始め、倫理学の検討を通してニククリッシュ理論の持つ飛躍及び本質主義の規定を批判し、これを克服せんとしている態度、又不可知論の見知から行為自体の善悪を離れて一定の観点から科学としての封鎖性を確立せんとしている努力は、上述の現代的人間生活と行為、及び科学の位置と使命と照し合せた時、我々はその不備な点が多いにかかわらず科学としての経営経済学を指示する或いは指示した学者の一人であると思う。

(注1) リゾプスキーは一九二七年から一九五二年まで活躍したの

だが、スイスという特殊事情のためか、今日まで殆どわが国の学界では問題にされなかつた。

- (注3) A. Lisowsky: Grundproblem der Betriebswirtschaftslehre, St. Gallen, 1954, S. 4. ff. besonders 5.
- (注4) A. Lisowsky; a. a. O., S. 7.
- (注5) A. Lisowsky; a. a. O., S. 6.
- (注6) A. Lisowsky; a. a. O., S. 10.
- (注7) A. Lisowsky; a. a. O., S. 11.
- (注8) A. Lisowsky; a. a. O., S. 16, 18,
- (注9) A. Lisowsky; a. a. O., S. 129.
- (注10) A. Lisowsky; a. a. O., S. 23. ff.
- (注11) A. Lisowsky; a. a. O., S. 25, 31, 39.
- (注12) A. Lisowsky; a. a. O., S. 31~32.
- (注13) A. Lisowsky; a. a. O., S. 28.
- (注14) A. Lisowsky; a. a. O., S. 31.
- (注15) リゾプスキーは精神科学の本質的特質を理解 Verstehenに置く。この考え方はやや古い客観主義の立場に関係すると思われる。従って彼は経営経済学を精神科学から簡単に除外するので、後の経済学と経営経済学の規定が曖昧になっていると思われる。
- (注16) A. Lisowsky; a. a. O., S. 89.

転換期に立つ経営経済学

- (注17) A. Lisowsky; a. a. O., S. 91.
 - (注18) A. Lisowsky; a. a. O., S. 91.
 - (注19) A. Lisowsky; a. a. O., S. 94.
- 〔附言〕 リゾプスキーの自然科学・精神科学・経済科学・経営経済学の関連の論議は、本論題自体と紙数の関係から省略した。又別の機会に取り上げ、批判的検討を加えたいと思っている。

経済学会報告会論題

四月廿五日	ロルンシュ帝国貨子帳	宇尾野 久
五月二日	ドイツ農民戦争の原因をめぐる諸問題	寺 尾 誠
五月九日	地方経済観察の意義について	小島 栄次
五月十六日	明治における経済学の発達	島崎 隆夫
五月廿三日	資本の集積・集中と分裂・分散 ——中小工業論序説——	北 原 勇
五月卅日	生産性と賃金	尾 崎 巖
六月六日	労働供給機構について	小尾 惠一郎
六月十三日	規範経営学批判	小島 三郎
六月廿日	オートメーションと生産管理	野 口 祐
六月廿七日	一八世紀英仏社会思想の発展と ワイリアム・ゴドウィン	白 井 厚
七月四日	沖繩帰朝報告	鈴木 諒一